様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７９２５８５

研究課題名（和文）精神看護者の心理的距離に関する臨床判断・看護行動の類型化及び新人教育ガイドライン

研究課題名（英文）Classification of clinical judgement and nursing activity in terms of psychological distance of psychiatric nurses-focusing on creating guidelines for newcomers.

研究代表者
槇本　香（Makimoto, Kaori）

高知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：００６１１９７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、精神科看護者による心理的距離に対する臨床判断と看護行動を明らかにし、新人看護師が活用できるガイドラインを作成することを目的とした。インタビュー内容より、心理的距離における【臨床判断】には、3つの側面があり、9つの視点が抽出された。【看護行動】では10の視点が抽出され、更に【基本的姿勢】として、2つの視点を抽出した。これらの結果をもとに新人看護師向けのガイドラインについて検討した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the characteristics of clinical judgement and nursing activity of psychiatric nurses from the point of view of psychological distance so that effective guidelines for newcomers can be designed. By analyzing the interview conducted for the study three aspects and nine viewpoints were abstracted about clinical judgement, ten viewpoints about nursing activity and two viewpoints about fundamental attitude regarding psychological distance. The results provided a basis for discussion on the educational guidelines for newcomers.

研究分野：精神看護

キーワード：心理的距離　臨床判断　精神科看護者　教育ガイドライン

１．研究開始当初の背景

精神疾患をもつ患者にとって、特に課題として取り挙げられる困難さに、コミュニケーション及び対人関係の障害が挙げられる。統合失調症をもつ患者では、「他者との間に信頼関係が築きにくい」「他人との関係性において常に不安を抱えている」(Arieti,2004)などと表現される。また、摂食障害をもつ患者では対人関係における自信のなさや孤独感(松木,2006)が特徴的にみられる。このように、精神疾患をもつ患者は対人関係において多くの困難さを抱えており、これが社会生活を営む上での生きづらさに直結しているものと考えられる。

そのような中、看護者は精神疾患をもつ患者との関係性を築く中で、患者との心理的距離を看護行動のなかに織り交ぜながら、柔軟にその関わりのパターンを変化させている。海外の文献をみても、患者-看護者関係の中で、信頼関係を築き、看護者自身が治療的な一つの道具として自分自身を活用することの必要性について述べられており、日本のみならず、文化の異なる海外においても、看護者が専門職業人として、患者との関わりの中で、両者の間にある距離のバランスを保つことの重要性について研究されており(Marit.H,2003;Angel.W,2001)、人々の関心は高い。

先行研究において、心理的距離について精神科看護者の心理的距離と心理的距離に影響を与えているものとの関係性(香月ら,2006)や逆転移などの心理的距離に影響するものとの関係性を量的な手法で明らかにした研究(香月,2009)は見受けられた。しかし、看護者の臨床判断や看護行動とのつながりについて質的な研究方法を用いて明らかにしたものは見受けられなかった。本研究により、統合失調症および摂食障害をもつ患者との援助関係において、精神科看護者がどのような臨床判断に基づきながら看護行動を展開しているのかを明らかにし、これらの類型化をはかることは、その結果として精神科看護者が用いる関わりの技術を明確化することができると考える。精神科看護者が用いる看護技術は、その表現方法も多岐にわたり、伝えることが困難なものでもある。したがって、本研究を通して、精神科看護者の技術を明確化することは精神科看護技術の教育に大きな貢献ができるものと考えた。

２．研究の目的

本研究では、精神疾患を有する患者との関わりの中で、精神科看護者が臨床判断に基づきながら、心理的距離を看護行動としてどのように展開しているのかを明らかにすることを目的とした。また、得られた結果から、新人看護師向けに「心理的距離のもち方に関する教育ガイドライン」を作成することを目指した。

３．研究の方法

(1)研究デザイン

質的帰納的研究方法

(2)研究対象者

精神科経験年数５年以上の熟練看護師を対象とした。

(3)データ収集方法

半構成的インタビューガイドを用いた面接調査を実施した。半構成的インタビューガイドは、文献検討を基に作成し、プレテストを実施して洗練化したものを用いた。精神疾患をもつ人との関わりで、心理的距離について意識して関わったケースのエピソードを語ってもらい、関わりのなかで展開した臨床判断や看護行動について質問をした。インタビューは一人１時間から１時間半実施した。

(4)データ分析方法

面接にて得られたデータより、逐語録を作成し、対象者の語った内容から、精神科看護者が用いる心理的距離に基づく臨床判断と看護行動に関する部分を抽出した。類似したコードを分類し、抽出したコードをカテゴリー化するなかで、コードとカテゴリーの特性を検討･分析した。

(5)倫理的配慮

研究の主旨と倫理的配慮について、文書と口頭にて対象者および施設責任者に説明をし、研究への参加に同意を得た上で実施した。説明内容としては、研究への参加は対象者の自由意思であること、研究参加の途中辞退の保障および途中辞退による不利益が生じないことの保障、匿名性保持の保障などを行った。なお、本研究は研究代表者が所属する大学における倫理審査委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

(1)対象者の概要

対象者は７名の精神科看護師である。看護臨床経験年数は７年～43 年で、精神科での臨床経験年数は７年～20 年であった。対象者のうち２名が精神看護専門看護師で５名は病棟看護師であった。また、７名のうち１名が精神科デイケアでの看護経験があった。語られた患者の疾患群は統合失調症、アスペルガー症候群、摂食障害、気分障害(うつ病)であった。対象患者が示す対人関係の特徴としては、看護者との関わりのなかで、無視をする(反応を示さない)、攻撃性を示す、自閉的、拒絶的、過適応な患者が挙げられた。分析の結果、精神科看護者の心理的距離では、【臨床判断】、【看護行動】、【基本的姿勢】という３つの側面から成ることが分かった。

(2)心理的距離に関する臨床判断

心理的距離に関する【臨床判断】では、＜

患者のアセスメント＞、＜看護者自身のアセスメント＞、＜患者－看護者関係のアセスメント＞の 3 つが含まれており、看護師は患者の精神状態や患者と看護者との関係性を査定し、看護者自身の状況や準備性を振り返ることで、患者との間の心理的距離を検討し、看護行動に展開していた。

□ 患者のアセスメント

患者のアセスメントとは、患者自身がもっている対人関係上の特性や精神症状による対人関係への影響、対人関係上の変化に関する情報を収集し、患者と看護者との間の適度な心理的距離をもつものである。患者のアセスメントの視点としては、以下の項目が含まれる。

①患者に特徴的な対人関係のもち方を査定する
②患者からの接近の仕方を査定する
③精神症状の出方を査定する
④対人関係上の変化を査定する

□ 看護者自身のアセスメント

看護者自身のアセスメントとは、看護者自身がもっている対人関係上の特性や相手に与える影響力を捉えること、看護者自身の限界を知り、対応可能な範囲を知ることを通して、患者と看護者との間に適切な心理的距離をもつものである。看護者自身のアセスメントの視点としては以下の項目が含まれる。

①看護者が患者に与える影響力を査定する
②看護者の限界を知り、許容可能な範囲を査定する
③看護者自身の心の動きを客観的に査定する

□ 患者－看護者関係のアセスメント

患者－看護者関係のアセスメントとは、患者と看護者がお互いにどの程度影響を与え合っているのかを捉えること、また、互いの影響力に対して、リスクをどれだけ孕んでいるのかを捉えることを通して、患者と看護者との間に適度な心理的距離をもつものである。看護者自身のアセスメントの視点としては以下の項目が含まれる。

①患者にとっての看護者に対する認識の程度を査定する
②互いへの影響(リスク)を査定する。

(3)心理的距離に関する看護行動

心理的距離に関する【臨床判断】を受け、実際のケアや患者との関わりに展開したものが【看護行動】である。この【看護行動】には、実践した後に患者との関係性を再度査定する評価が含まれており、これは【臨床判断】に戻り、それぞれが互いに循環していた。心理的距離に関する【看護行動】には以下の視点が含まれていた。

①互いの意向を言語化し、伝え合う
②変化を強いない日常をつなぐ
③一貫した枠組みで対応する
④看護者がオープンになり患者の関心を拡げる
⑤患者の“守り”にむやみに立ち入らない
⑥看護チームの役割を明示する
⑦患者が安心できる人や場につなぐ
⑧患者の目標や希望に同意と支持の姿勢を示す
⑨説得力のある見立てを患者に説明し、信頼を得る
⑩患者が意思表示できる場を設ける

(4)心理的距離に関する基本的姿勢

心理的距離に関する【臨床判断】および【看護行動】の基盤となるものが【基本的姿勢】である。【基本的姿勢】は看護者が患者との心理的距離のなかで、方向性が見出しにくくなった際に今一度、両者の関係性を客観的に見直す際に、自分と患者との違いを明確に認識することを通して、相手の意向や選択を尊重することが含まれた。また、一つの見立てだけでなく、様々な見立てと仮説を立て、より柔軟にケアの方向性を検討することを行っていた。これらの【基本的姿勢】は精神科看護の患者－看護者関係において、医療者主導の看護活動から、より患者の個別性に応じたケアの拡大へとつなげる基盤ともなり、看護者の倫理的な思考が含まれるものと考える。心理的距離に関する【基本的姿勢】には以下の視点が含まれていた。

①自分と相手との違いを受け入れる姿勢
②様々な見立てを柔軟に取り入れる姿勢

(5)ガイドラインの作成

以上の結果をもとに、「精神看護者の心理的距離に関する新人教育ガイドライン」(案)を作成した。本ガイドラインは心理的距離に関する【臨床判断】【看護行動】【基本的姿勢】から構成されている。

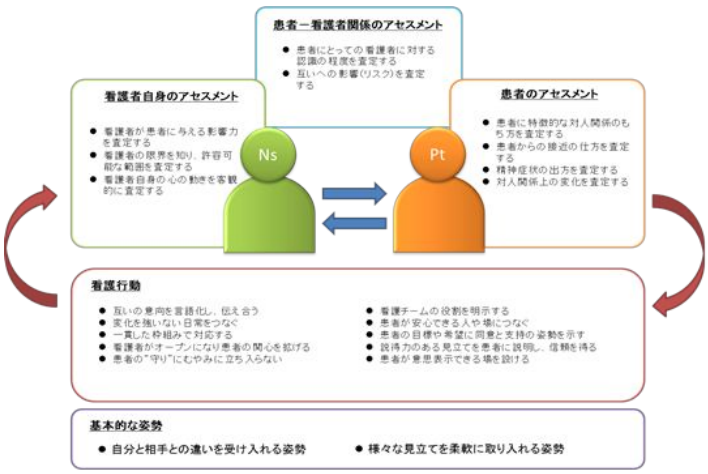

図 1) 精神看護者の心理的距離に関する臨床判断・看護行動のガイドライン 全体図

今後は精神科の新人看護師にガイドラインを説明し、実際に活用していただき感想などを得ることで、ガイドラインの洗練化をはかりたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１件）
槇本香,野嶋佐由美,田井雅子：心理的距離のもち方における看護者の姿勢－統合失調症をもつ患者との関わりから,高知女子大学看護学会誌,38(2),p99-107,2013.

６．研究組織
(1)研究代表者
槇本 香（MAKIMOTO KAORI）
高知県立大学・看護学部・助教
研究者番号：00611972